



シーニックデッキ&シーニックカフェ スタンプラリー2023が始まります!



シーニックバイウェイ北海道では、昨年に引き続き、全道のシーニックカフェ&シーニックデッキを対象としたスマホスタンプラリー※を開催します!スタンプを集めると抽選で、素敵な特産品などが当たります!ドライブへ行ったら際は、ぜひシーニックデッキ&シーニックカフェにお立ち寄りください!

開催期間(予定):2023年7月1日(土)~2024年1月31日(水)



広大な牧場、眼下に広がる海、一面のお花畑、紅葉にそまる山々、どこまでも広がる畑、四季折々の美しさを見せる秀峰...。シーニックデッキは、美しい景観を見ることができる地元住民おススメの場所です。



景観のよい場所でのんびりコーヒーを飲んだり、地元食材を使ったお食事を味わったり、地元発信の観光情報があったり、地元の人と交流できたり...。シーニックカフェは地域の魅力がいっぱいの地元住民おススメのカフェです。



シーニックデッキ・カフェの情報はこちら!
シーニックバイウェイ北海道



北海道日本ハムファイターズ×道の駅×シーニックバイウェイ北海道

コラボ道の駅 特別 連携企画2023!!

シーニックバイウェイ北海道と包括連携協定を結ぶ(株)北海道日本ハムファイターズと北海道地区「道の駅」連絡会が、今年もシーニックバイウェイ北海道とタッグを組み、オリジナルマグネット&キーホルダーを製作しました!全73の道の駅で絶賛発売中!販売中の道の駅は、「シーニックドライブマップ2023年度版」に掲載していますので要チェック!

ドライブマップでチェックして
巡ってみてね!!

ファイターズコラボ 道の駅 全73駅
(取り扱い道の駅はシーニックドライブマップ2023年度版をご参照ください)

全56
種類!!



マグネット
サイズ:約H77mm×W51.5mm
550円(税込)



アクリルキーホルダー
サイズ:約H80mm×W29mm
550円(税込)

全73
種類!!

※画像はイメージです ※数量に達し次第終了となる場合がございます ※一部道の駅では昨年と同じデザインのコラボグッズを販売いたします



「シーニックドライブマップ2023年度版」発売中!

定価200円(税込)

シーニックドライブマップ2023年度版が発売中です!特集は、北海道らしい絶景が見られる地元おススメ「推し道♥」と、その他道の駅に行ったら必ず食べたい、絶品「道の駅スイーツ」をご紹介します!また、地元ならではの「イチオシ!地元ごはん」も要チェックです!

道の駅 マップ付き! 全道の道の駅で購入できます!



編集後記

早くも6月ですね!街にも外国人観光客の姿が多く見られるようになりました。これからの観光シーズンに向け、みなさんはどんな計画を立てておられるでしょうか?まだこれからという方にお知らせです。北海道のよりみちドライブ情報誌「Scenic Byway vol.31 夏秋号」が6月30日より配布開始となります!今回のテーマは「Drive & 拓く」。「拓く」とは、未知の分野に進む、またはきりひらくという意味の言葉。北海道には、開拓の時代から様々な挑戦を重ねてきた歴史があり、それは同時に、北海道で暮らすたくさんの方々の歴史そのもの。そして、「拓く」は未来へ向けてのチャレンジでもあります。そんな「拓く」にちなんで旅を、シーニックバイウェイ北海道のルートコーディネーターがご紹介します。北海道のよりみちドライブ情報誌「Scenic Byway vol.31 夏秋号」は全道の道の駅で配布します。ぜひ手に取ってご覧ください!(RW)



dec monthly vol.453

2023年6月1日発行

発行人

倉内

公嘉

発行所

一般社団法人

北海道開発技術センター

〒001-0011

札幌市北区北11条西2丁目2番17

TEL (011) 738-3363

FAX (011) 738-1889

URL <http://www.decnet.or.jp/>

E-mail dec_info01@decnet.or.jp



Hokkaido Development Engineering Center

dec monthly

2023.6.1 vol.453 デックマンスリー



- Monthly Topic (マンズリートピック)
〈寄稿〉北海道ボールパークFビレッジの紹介
- dec Report (デックレポート)
令和5年度 dec定時総会

dec Interview >>> 北広島市長 上野 正三 氏

「札幌のベッドタウン」のイメージが根強かった北広島市。「北海道ボールパークFビレッジ」誕生を機に目覚ましい変貌を遂げようとしています。このビッグな官民連携のまちづくりプロジェクトの先頭に立ってこられた上野正三市長をお訪ねしました。

北海道日本ハムファイターズの新球場「エスコンフィールドHOKKAIDO」を擁する「北海道ボールパークFビレッジ」が今年3月に開業しました。まずは、ボールパーク誘致に乗り出された背景についてお聞かせください。

ボールパークの用地となったのは、1970年に広島町(現・北広島市)で計画された総合運動公園の予定地でした。当時の穴田輝行町長が、同年着手の道営北広島住宅団地の造成を見越し、非常にスケールの大きな運動公園をつくらうと計画決定したのです。

ところが、将来人口3万人余と言われた大規模住宅団地の整備は、それ自体、町にとって大変なことでした。上下水道はない、道路はジャリ道からの整備というゼロからのスタートで、町はインフラ関連の整備に手一杯でした。

その後、住宅団地の整備が落ち着いてきたところに、二度ほど総合運動公園計画について進展の動きがあったのですが、財政負担の問題などもあり、結局、手がつけられないままになっていました。

月日は過ぎて2015年、国交省の支援事

業で官民連携まちづくりに関する調査を実施したときに、大規模運動公園を手がけている大きな事業所と協議させていただく機会を得ました。そのなかで最後に協議したのが(株)北海道日本ハムファイターズさんでした。同球団の二軍の試合ができる野球場についてどんな整備が必要なのか、意見交換させていたいただいたのです。これがボールパーク構想につながる取り組みのスタートだと思っています。

たび、ファイターズさんとのご縁はすでに2002年にありました。同球団が本拠地を北海道に移転したのは2004年ですが、それに先立って球団は室内練習場をつくる場所を求め、あちこちに声をかけておられました。本市も札幌ドームから車で20分という大曲地区に好適地があると提案したのです。誘致には至りませんでした。当時、移転準備に当たっておられたのが、後に球団代表になられた島田利正さんでした。以来、球団とは少しずついろいろなところでご縁を得ることになりました。

近年は、市内に所在する星槎道都大学や札幌日大高校がプロ野球選手を輩出していますし、古くは広島カープファンが多いなど、もともと野球の盛んな土地柄でもあるようですね。

古葉竹識監督時代(1975~85年)の広島東洋カープですから、かなり昔のことですが、毎年、円山球場で巨人戦をして、その遠征のときに古葉さんは必ず広島町に

夢と希望の発信源になることを願っています。

dec Interview

うえの まさみ

1948年恵庭市生まれ。70年北海学園大学経済学部卒業後、広島町(現・北広島市)役場入庁。99年建設部長、2003年総務部長、04年北広島市助役を務め、05年同市長選に出馬して当選。その後、無投票による連続当選を経て21年市長選に当選し、現在、5期目。趣味はスポーツ。最近は登山や歩くスキーを楽しむ。



来てくれました。「この町は広島とゆかりある地」だと言って、少年野球教室を開いて指導してくれたのです。当時、少年野球チームは8チームほどあったと思いますが、広島にゆかりのあることから、どのチームも「〇〇カープジュニア」と名乗っていました。青いブルーのユニフォームに赤い帽子も同じでしたね(笑)。現在、「カープジュニア」を名乗るチームは少なくなりましたが、少年野球は活発です。

実は、現在の北広島市役所野球部も強くて、昨年は「全道自治体職員等野球選手権大会」で全道優勝し、さらに全国優勝大会(新潟市)で準優勝をおさめています。

ファイターズが新球場を核としたボールパーク構想を公表したのは2016年5月。早くも翌月に北広島市は誘致を表明し、17年から球団との実務者協議が始まっていますね。

前述のように、総合運動公園予定地の37haという広大な用地は国有林を含む緑豊かな公園「北広島レクリエーションの森(レクの森)」にも隣接し、道内外から球場を訪れる人に「北海道」を体感してもらえる、まさにボールパーク最適地だと考えていました。また、市は人口減少という深刻な課題を抱えており、地域活性化と持続可能なまちづくりのためにボールパーク誘致はまたとないチャンスと、すかさず手を挙げさせていただきました。

誘致に際しては市民説明会などを通じて情報共有を図りましたが、当初から市民の方々の感触は非常によかったですね。北広島市芸術文化ホールで説明会を行ったときなど、会場満杯の市民で大変な盛り上がりでした。16年に、市では野球場の構想などの提案書を作成し、球団に提出しましたが、これに市民の応援メッセージをつけようと募ったところ、短期間で約8千人のメッセージが集まりました。

球団の構想発表を受けて当初、札幌、恵庭、江別、千歳など近隣の自治体がいくつも誘致に手を挙げましたが、やがて札幌市との一騎打ちになって17年には両市で球団の実務者協議が始



まりました。

この球団との実務者協議は最終的に数十回を重ねることになるのですが、その対応は本当に大変でした。市では17年に「ボールパーク推進室」を設置し、専任職員4名と技術士など兼務者を入れて14人体制で臨みました。民間企業は案件決済などのスピードが速く、行政がそれに合わせるのは至難の業ですが、なんとか即応できるように努めました。

球団側にしてみれば、600億円に達するような巨額投資をするのですから、候補地の選定に慎重を記すのは当然のことでしょう。本市としては、「市民」「行政」「事業者」にとって「三方よし」を念頭に協議を重ねました。

その結果、2018年3月に北広島市に内定し、10月に正式決定となりました。自信のほどはいかがだったのでしょうか。

札幌市か本市か、という大詰めの検討では、球団側も非常に慎重に対処されていました。本市としては固定資産税の10年間免除など諸々の優遇条件を提案させていただいていましたし、野球などスポーツをする人からは、札幌市の候補地より本市の方が、環境が良いという意見を多く聞いていました。

しかし、ファイターズの北海道移転時には札幌市の経済界等との関係がありましたし、最終決断するのは親会社である日本ハム株式会社さんですから、いろいろな経緯を含めて判断されるだろうと思いました。私自身も最後

までどちらに決まるか、わからなかったですね。

本市決定には、総合運動公園予定地という広大で土地利用の自由度の高い用地のほかに、札幌からJR快速で16分、新千歳空港から20分、さらに道央自動車道のICもあるという道内外からの交通アクセスの良さが大きな決め手になったのではないかと考えています。

Fビレッジが開業してまだ1カ月余りですが、まちの変化についてはどう受け止めておられますか。人口減少抑制への期待は。

私が住む北広島団地地区では、近隣で子どもの姿を見かけることが増えましたね。車の運転にも気をつけなければと覚えているところです。

この地区にある緑ヶ丘小学校の児童数を見ると、ボールパーク建設が決まる前までは1学年20人前後で1クラスでしたが、決まって間もなく1年生が50人台となって2クラスになりました。北広島駅に近い東部小学校でも全校で約30人増えたと聞いています。子どもたちが増えていることは何よりです。

また、団地地区では、高齢者が住み替えで売却した宅地に若い世帯が居住し、入れ替わりが進んでいます。空き家のなかにも、道外にいる子ども世代が「環境がいいので、いずれ戻るから売らないでほしい」という求めに応じて高齢者が売却しない場合もあるようです。

このような変化は嬉しいことですが、まだまだ市の人口増を期待するところまではいきません。というのも高

齢で亡くなる人の数が出生数を大きく上回っており、転入者が増加していますが、今後の死亡者数の増加傾向を補うまでには至っていません。

ただ、元気な高齢者の方が増えていることも実感しています。市内には100歳以上の方が50人近くおられるのですが、以前は100歳のお祝いにかがうと、病院で寝たきりの方が多かったのが、近年は半分ぐらいは自宅におられ、お元気で過ごされている。この変化は凄いことだと思っています。

北広島市ではボールパーク構想を契機に新たなまちづくりが進展しています。JR北広島駅周辺をはじめ、これからの数年でまちのイメージは大きく変わっていきそうです。

本市のまちづくりは北広島市総合計画(第6次/2021~30年度)に基づき、めざす都市像として「希望都市、交流都市、成長都市」を掲げて取り組んでいます。北海道日本ハムファイターズさんは「スポーツ・コミュニティ」を企業理念にまちづくりに携わり、市民に夢や希望をもたらしてくれており、それは市がめざすまちづくりと同じ方向性だと受け止めています。野球にあまり関心のない高齢者の方から「Fビレッジは凄い。楽しかった」という声が届くと、それを実感しますね。

現在、JR北広島駅周辺では、(株)日本エスコンとの連携で元市有地を活用した駅西口周辺エリア活性化事業が

進んでいます。Fビレッジ開業に合わせて駅前広場の基本的な整備は終わりましたが、来年には駅前広場をはさんだ駅の向かい側に複合交流拠点施設(14階建/飲食ゾーン、ホテルなど)と立体的広場・公園(イベントスペースなど)が完成します。

さらに西側の北進通をはさんだ北広公園の隣接地には居住交流施設(15階建/子育て支援施設、分譲住宅など)の建設を計画しており、北広公園の一部整備を含めて25年の完成予定です。駅東口付近も、民間による賃貸マンションやホテル建設の計画があり、ここ数年で北広島駅周辺の都市機能や交通機能は飛躍的に充実することになります。札幌への近さから従来、地場の飲食店や商業施設が少なかった北広島ですが、これからは大きく変わっていきますね。

一方、Fビレッジ開業に向けて2つのアクセス道路の新設を計画しましたが、札幌、大曲方面からFビレッジにつながる道道きたひろしま総合運動公園線は今年3月に完成しています。団地地区などの市民にとっては札幌方面に抜ける快適な道路として利用されているようです。もう一つ、国道274号からJR千歳線を越えてFビレッジに至る、市道西裏線のバイパス整備は、橋梁部分が多く費用も時間もかかりそうです。ただし、Fビレッジは地域の防災拠点でもあるので、アクセス道路はその面からも重要だと思っています。

JRに請願している新駅建設につい

ては、JRから建設費用の大幅増額を提起されているところですが、より安価に建設する方法を模索、提案しながら、令和9(2027)年度の完成を目標に、今後、協議を進めたいと思っています。

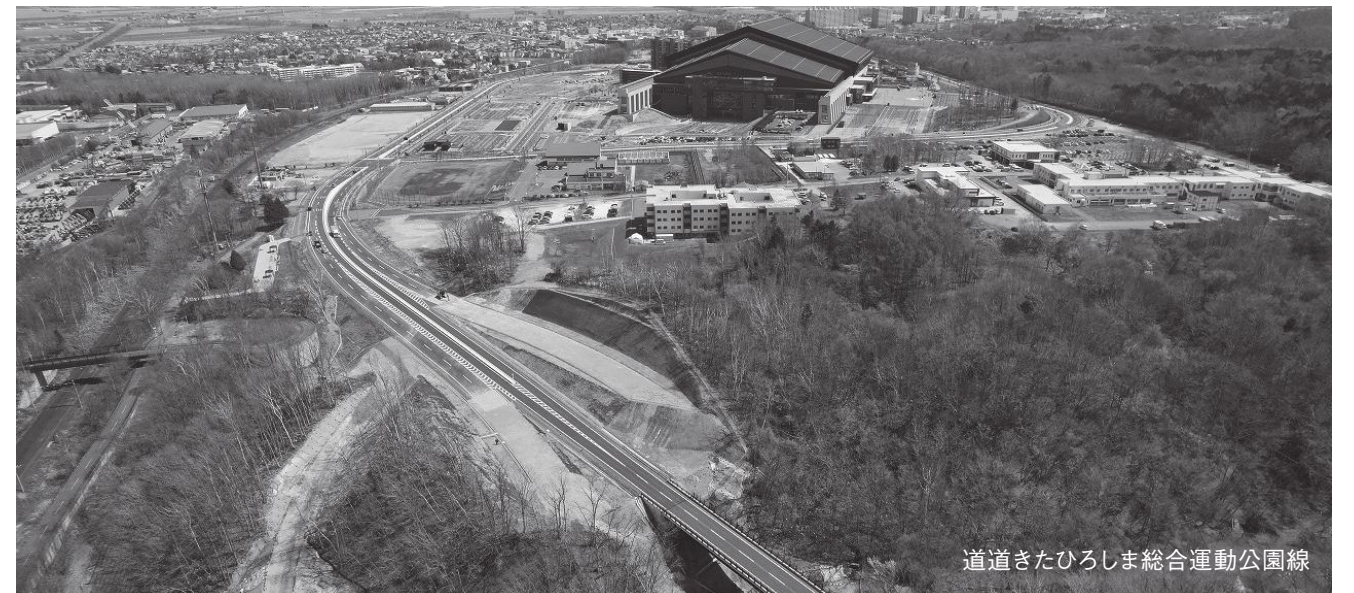
人口6万足らずの小さな自治体が、このようなビッグプロジェクトを実現させたということで視察が絶えないようですね。

沖縄や広島など全国各地から来ていただいていますね。お世話になっているところも多いので、できるだけお断りしないようにしています。

Fビレッジが本市全体や市民にどんな効果や影響をもたらしているのか、注目されているところだと思いますが、この木製コースターもその一つでしょう(写真参照)。これは、市内輪厚にある道立北海道白樺高等養護学校の生徒さんが木工学習のなかで製作してくれたもので、木材はボールパーク建設のために伐採された樹木。加工のための機材とあわせて市から学校に木材を提供し、このような「F VILLAGE」と銘の入ったコースター(非売品)が生まれました。こういうこともご紹介しておきたいと思います。



道立北海道白樺高等養護学校の生徒さんが製作した木製コースター



道道きたひろしま総合運動公園線

今年3月30日、北海道北広島市に「北海道ボールパークFビレッジ」(Fビレッジ)が開業しました。「世界がまだ見ぬボールパーク」として、既成概念にとらわれないエリアが誕生。ファンやパートナー、地域の人々と一緒に、地域社会の活性化や社会への貢献につながる「共同創造空間」を目指しています。国籍や年齢、性別問わず、多くの人が集う場所として産官学様々なパートナーシップとの連携は不可欠です。特に、地域社会の将来を担う子どもの多様な選択肢と成長に寄与する活動に注力しています。

約32haの広大な敷地面積を最大限に生かし、文化交流が活発な街づくりを進めています。核となるのは、プロ野球・北海道日本ハムファイターズの新球場「ES CON FIELD HOKKAIDO」(略称:エスコンフィールド)。特徴的な三角屋根によって、北海道の大自然の中にあっても溶け込む風貌になっています。日本初の開閉式屋根付き天然芝の球場で、芝の育成を促すために南側は一面ガラス壁で光を取り込む工夫が施されています。北の大地に革新的で、プレイヤーとファンファーストの両立を目指す球場が完成しました。

エスコンフィールドには、これまでの野球場の概念を覆す試みが詰まっています。試合のない日も外野エリアは入場無料で開放。小学生以下は、試合のある日も無料で自由に

入場できます。幅広い年齢の子供たちが楽しめる日本最大級のあそび場「リポビタンキッズ PLAYLOT by ボーネルンド」をはじめ、世界初のフィールドが一望できるクラフトビール醸造レストラン「そらとしば by よなよなエール」などが営業しています。これからの季節、球場内で醸造されたオリジナルクラフトビールを片手に、ルーフトップスペースで一杯いかがでしょうか。

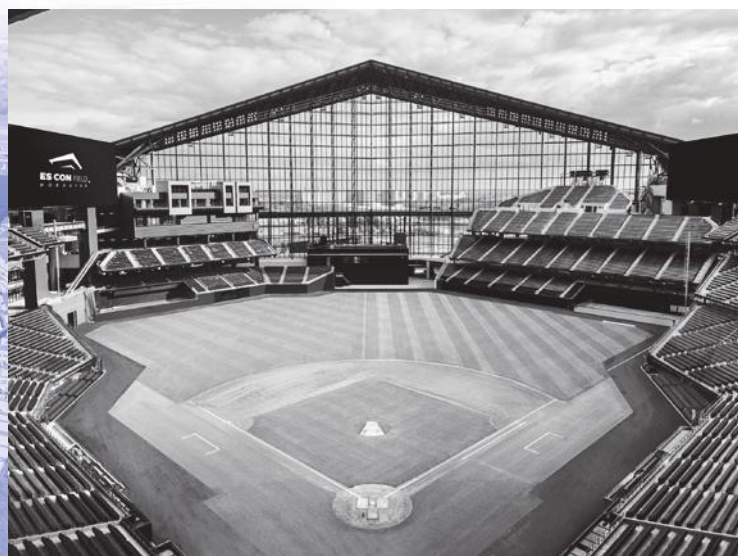
レフト側にある5階層ビル「TOWER 11(タワー・イレブン)」も通年営業しています。「11」は、過去にファイターズで背番号11を背負ったダルビッシュ有選手、大谷翔平選手に対する敬意を表して命名されました。日本初のフィールドが一望できる球場内ホテル「tower eleven hotel」や、世界初の球場内天然温泉サウナ「tower eleven onsen & sauna」北海道初上陸となる世界最先端の乗馬シミュレーターを導入した「乗馬倶楽部銀座HOKKAIDO」など、試合日はもちろん、試合がない日も楽しめる施設が盛りだくさん。フードホールでは日本ハムグループが調達・提供する北海道食材を味わえる3店舗を展開しています。

飲食店舗は常設、ワゴン、POP UP 含めてエスコンフィールド内に約50を展開。北海道初出店や限定メニューなどバラエティ豊かに取り揃えています。「エスコンフィールド入場券」があれば、観戦チケットがなくても球場

事業統轄本部 広報PR部
(株)ファイターズスポーツ&エンターテインメント

北海道ボールパークFビレッジの紹介

グルメを楽しみに来場することも出来ます。日本全国から選りすぐりの10店舗が集まったエリア「七つ星横丁」では焼肉や寿司を味わうことができ、これまでのスタジアムにはなかった試合終了後も飲んで、語らえる空間になっています。



球場の南側は、特徴的な三角屋根と一面のガラス壁により、開放感が生まれている



写真右:オリジナルクラフトビールを片手に試合観戦ができるクラフトビール醸造レストラン「そらとしば by よなよなエール」

野球を見て、グルメを味わう以外にも楽しめる体験型プランも実施中です。「きつねダンス」で一世風靡したファイターズガールがガイド役を務める「スタジアムツアー」では、従来の球場では関係者以外は入ることが出来ないチームエリアを見学できるプランが好評です。細部にまでこだわりが宿ったチームロッカーや革新的なミーティングルーム、北海道日本ハムファイターズ新庄剛志監督からの希望で、監督室を特別に公開しています。試合がない日だからこそ味わえる、貴重な体験が待っています。

エスコンフィールドのほか、Fビレッジの「沢エリア」には、宿泊施設やこども園、農業学習施設に商業施設などが広がっています。今後はアクティブシニア向けレジデンスの建設も決定しており、これからも「街」として形成されていきます。沢エリアも通年営業のため、試合のない日もシャトルバスが運行。Fビレッジ最寄りのJR北広島駅をはじめ、JR新札幌駅、新千歳空港

から発着しています。駐車場は約4000台を完備。JR北広島駅からは徒歩約19分です。行きの道中は胸を膨らませながら、帰りの道中はエスコンフィールドでの話を咲かせながら歩いてみるのはいかがでしょうか。

宿泊施設を利用して、見どころ盛りだくさんのFビレッジで過ごしてみるのもオススメです。エスコンフィールド内「tower eleven hotel」は4つの部屋タイプで、計12部屋がベースボールや球場にちなんだ異なるコンセプトになっています。フィールド側に面した客室は8部屋を用意。夕張岳を見渡せる4室に泊まると宿泊者限定のルーフトップテラスから試合を観戦できるため、特別感が味わえます。宿泊者は「tower eleven onsen & sauna」を利用でき、半屋外のサウナゾーンからもフィールドを見渡せます。

宿泊施設は沢エリアにも。水辺越しにエスコンフィールドが望める「VILLA BRAMARE」(ヴィラ ブラマーレ)とグランピング施設「ALL-

PAR」(オルパ)があります。ヴィラは全9棟がスイート仕様で、1棟貸切りによってプライベート空間を過ごせます。愛犬とともに宿泊できる専用棟もあり、サウナは棟によって異なるデザインになっています。オルパは全8棟で、専用ウッドデッキにはバーベキュー用のガスグリルと焚火台を完備。こちらも愛犬と一緒に過ごすことが出来る専用棟があり、プライベート空間を堪能できます。

通年営業しているFビレッジだからこそ、シーズン通して様々なイベントを開催しています。1年を春夏秋冬・厳冬期の5つに分けたシーズンイベントでは、各時期を感じられる企画を用意。第1弾「PLAY SPRING」では著名ヨガインストラクターを講師に招いたヨガ&フィットネス体験や、エスコンフィールドの世界最大級のビジョンを使って映画上映などが行われました。野球場の枠を超え、人々が集まるイベント会場としても活用されています。今後もシーズンに合った体験型イベントを実施予定です。

ボールパーク構想が具体化した2015年から、さまざまな期待や不安などの思いを受けながら開業に至りました。開業後も本格的な夏を前に、ドッグランやアスレチック施設「ADVENTURE PARK」がオープン。今後は新駅が誕生予定など、これからも「街」として広がり続けていきます。Fビレッジを訪れる人々やパートナー企業の力を借りながら「北海道のシンボル」になるその日まで、歩みを進めていきます。

令和5年度 dec定時総会

令和5年度dec定時総会が5月31日、京王プラザホテル札幌において開催され、予定の4議案が滞りなく承認されました。令和4年度の事業報告の概要は以下のとおりです。

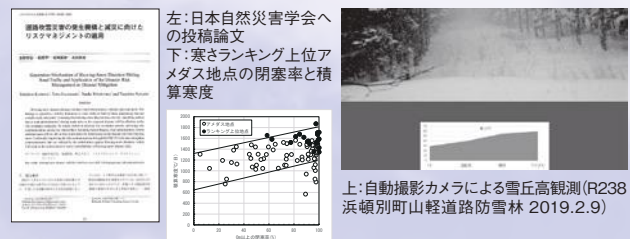
令和4年度の事業報告の詳細については、decホームページ(<http://www.decnet.or.jp/>)をご覧ください。

会員数(令和5年3月31日現在) 法人会員:215社 個人会員:66名

調査研究事業

雪氷障害に備えた安全な社会基盤に関する研究

気候変動等の影響により極端化する暴風雪災害や雪害、高齢化や人口減少等の影響により顕在化する除排雪問題や冬型事故など、積雪寒冷地特有の雪氷障害についての調査を行い、地域や社会基盤を守るための研究、提案を行った。



地域コミュニティを通じた地域振興及び観光まちづくりに関する調査研究

地域協働による各種調査・取組を通じて、地域資源の付加価値化や新たな地域コミュニティの創出及び産学官連携推進を目的として、観光・地域づくりに関する調査研究を行った。具体的には、道路沿道の景観保全や環境保全及びその活用に関する調査研究を地域活動団体の支援も含めて実施した。また、地域協働による先進事例の収集、地域ブランド力の構築に向けた新たなビジネスモデルの調査研究や地域ブランドの創出に向けた研究会等への参加と情報交換等を実施した。

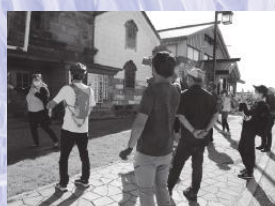
モビリティ・マネジメントや新技術を活用した公共交通の維持・発展に関する調査研究

今後の公共交通の維持・発展を目的とし、モビリティ・マネジメントやMaaS、CASE時代に対応した道路整備、交通結節点(バスタ)等のあり方について、調査・研究を実施した。なお、各種研究成果については、「土木学会」、「日本モビリティ・マネジメント会議」、「くらしの足をみんなで考える全国フォーラム」や「おでかけ交通博」、「日本地域学会」等で報告した。

第17回日本モビリティ・マネジメント会議の発表ポスター

北海道の自然・文化・歴史等を活用したツーリズムに関する調査研究

世界水準の観光地形成を目指して、北海道の自然・文化・歴史等を活用したツーリズムに関する調査研究を行う。具体的には、これまで調査研究を続けてきた、「北海道エコ・モビリティ」、「都市型サイクリング」、「アドベンチャートラベル」を踏襲し、北海道の自然・文化・歴史等を活用したツーリズムを担う人材の育成、受入環境の整備、ツーリズム商品の造成などについて調査・検討を行った。



DOAプレツアー(石狩の自然、歴史、鮭文化をサイクリングで体感)

ほっかいどう学の推進に関する調査研究

NPO法人ほっかいどう学推進フォーラムと連携し、北海道総合開発計画における「ほっかいどう学」の推進や、学校教育を通じた社会的ジレンマ問題の解消を図った。また、北海道の土木史や道路史に係る調査研究を実施した。そのほか、環境情報誌「エコチル」と協働による「公共交通魅力向上アイデアコンテスト」等を実施。各種研究成果については、(公社)土木学会主催の「土木と学校教育フォーラム」や、「土木史研究発表会」に参加・発表するとともに、併せて情報交換・事例収集等を実施した。



みんなで考える公共交通アイデアコンテスト(「さっぽろ雪まつり」での表彰式)

野生生物との共生に関する調査研究

北海道の道路木本緑化に関する緑化勉強会の開催、現地調査等を行い、積雪寒冷地に適した道路緑化樹の整備・保育手法に関する研究を行った。また、国道等で発生する動物との衝突事故等の被害対策検討に必要な調査研究、調査手法や対策手法の技術開発の検討を行うとともに、国内外の学会等での発表、参加により情報収集を行った。



エゾシカの被害対策に関する共同研究(忌避剤)

北海道の地域防災に関する調査研究

北海道における地域防災力の向上に向けて、関係機関・団体と連携しつつ、地域防災力向上方策等について検討する。また、道内外で開催される学会や研修会に参加し、教材研究及び全国防災関係者との情報交換を行った。



札幌市防災協会「防災・減災セミナー」根本教授による講演の様子

将来の北海道開発に関する調査研究

北海道総合開発計画のフォローアップや次期総合開発計画に資するための調査研究を行う。

各自主研究の成果概要は、decホームページをご覧ください→



役員の改選

新任役員 ● 会長:高野 伸栄氏 ● 副会長:高橋 清氏
● 理事:名取 哲哉氏 ● 理事:矢納 正人氏

田村 亨氏(会長)、中川 収氏(理事)、宮本 康二氏(理事)はご退任されました。長きにわたり、ありがとうございました。

情報収集・連携事業

寒地開発技術に関する情報・資料の収集整理

国内外の会議やシンポジウム及び各種研究機関等との交流を通じて、寒地技術や交通政策・地域政策に関する技術情報を収集、整理した。

技術資料等のデータベース化に関する調査研究

業務成果及び関連資料のデータベース化、自主研究や自主プロジェクトの成果等のデジタル化を図るとともに、全体の管理システムの検討を継続して実施した。

「寒地開発技術委員会」の設置

寒地開発技術の開発動向や方向性の検討を行うとともに、道路事業に関わる設計基準等の検討を行った。

インターンシップ制度

インターンシップの受け入れとして、冬期1day会社説明会を実施した。会社説明会開催に係る広報は、マイナビ2024(学生向け就職情報サイト)を活用して募集し、結果2名の学生が参加した。

沿道の環境を守り、活用する団体への支援事業

シーニックバイウェイ北海道の参加団体を対象に、活動団体が実施する沿道の環境を守り、活用する事業に関する共同研究事業を継続。特に、参加団体の連携事業に重点において研究を実施するほか、活動団体の研修派遣事業も同時に実施した。また、webやドライブ情報紙を活用した地域情報の提供も継続して行った。

広報・国際交流事業

広報・出版刊行等

- ニュースレター(dec monthly)の発行12回
- Webサイトの運営(<http://www.decnet.or.jp/>)

出版刊行図書

- 寒地技術論文・報告集vol.38の編集・発行
- 第22回「野生生物と交通」研究発表会講演論文集の編集

シンポジウム・セミナー

- 第38回寒地技術シンポジウム(開催地:札幌市)
- 第22回「野生生物と交通」研究発表会(開催地:札幌市 オンライン同時配信)
- 地域政策研究所セミナー等

国際交流

- 米国シーニックバイウェイ団体との交流
- 日中冬期道路交通ワークショップの準備
- ATTA(アドベンチャートラベル・トレード協会)との交流
- ISCORD(寒地開発に関する国際シンポジウム)

開発事業等に関する調査研究の受託・・・計82件

寒地開発技術委員会



インターンシップの受け入れ
冬期1day会社説明会[decがわかる1日仕事体験]
プログラム(リモートで実施)の様子



情報誌「Scenic Byway vol.30」



dec monthly(デックマンズリー)



↑第38回 寒地技術シンポジウム
→第22回「野生生物と交通」研究発表会



←日中冬期道路交通
ワークショップ
研究状況発表会の様子